

## デブリーフィングの実際と効果 ～マインドカードを使用して～

中嶋 真弓 平野 麻衣 正守 彩香 渥美 摩耶  
原 繭子 牧野 友奈 太田亜希子 植松 知子  
佐藤みつ子

静岡赤十字病院 3-7病棟

**要旨：**当院では、患者に質の高い看護を提供する為に、パートナーシップ・ナーシング・システム（Partner ship nursing sysstem；PNS®）を参考に独自のデイパートナー制をとっている。デイパートナー制とは、二人の看護師が相互に補完し合い、毎日の看護ケアの成果と責任を共有する看護提供体制のことである。マインドと言われる「自立・自助の心」「与える心」「複眼の心」の3つの心を合わせ持つことで、デイパートナーとのパートナーシップを、成功に導くことができる。また、終業時に行うデブリーフィングはよりペアの結びつきを深める事に繋がる。そこでより良いデブリーフィングにする為、当病棟では、マインドを意識できるよう作成したマインドカードを使用し、デブリーフィングを行うようにした。デブリーフィングの現状を把握するために、記録されたデブリーフィングの内容の分析と、アンケートを実施したところ、効果があった。

**Key words：**デブリーフィング、パートナーシップ、マインド

### I. はじめに

患者の最も身近な存在として、その人らしさを大切にし、看護師が質の高い看護を提供するために、当院では平成26年度より、福井大学のパートナーシップ・ナーシング・システム（Partner ship nursing sysstem；PNS®）を参考に、当院独自のデイパートナー制をとっている。橘らは、「PNSを成功に導くためには、看護師同士がお互いの違いを生かし、補完し合って、先輩・後輩という上下関係ではなく対等・平等な関係であること、患者を中心とした看護活動の目的を話し合い、共有し、同じ認識を持つこと、馴れ合いではなく信頼感と緊張感のある関係であること、お互いが持つ知識・技術を開示し可視化させることが必要となる。さらにパートナーシップ・マインドと呼ばれるパートナー間の『心の持ち様』も成功のために重要な鍵となる」<sup>1)</sup>と述べている。パートナーシップマインドを意識するため、当病棟で

独自のマインドカード（以下カード）を使用してデブリーフィングを行っている。そこで、デブリーフィングの現状を把握するためのアンケートを実施し、その結果と記録されたデブリーフィングの内容を分析した。

### II. 目的

カードを使用したデブリーフィングの効果を知らる

### III. 倫理的配慮

当院の看護部倫理委員会にて審査、承認を得た。研究対象者に対し、6項目を口頭で説明し、文章でも明記した。

#### 1. 研究対象者への説明6項目

- 1) 研究目的
- 2) 参加の自由とプライバシーを保護する
- 3) アンケートとデブリーフィング内容の記入

は無記名とし、個人を特定しない

- 4) 内容により個人が不利益を受けることがない
- 5) 研究結果については日赤医学会で発表する
- 6) 研究終了後はアンケートは破棄する

#### IV. 方法

##### 1. カードについて

- 1) 1つのマインドに対し2枚ずつ作成し、計6種類用意した。
- 2) PNS®マインドと言われている3つの心「与える心」「自立・自助の心」「複眼の心」を記した。
- 3) それぞれのマインドを、わかりやすい言葉、例えば「与える心」は「相手に感謝の気持ちを伝えましょう」に置き換えて、1つのマインドに対し2種類の言葉を用意し記載した。
- 4) スタッフへカードに親しみをもってもらえるよう装飾等の工夫をした（図1）。

##### 2. デブリーフィングについて

- 1) 毎朝始業時、各パートナーに、裏返した6枚のカードの中から1枚ずつ選んでもらった。
- 2) パートナー同士で、マインドについての意識の確認をした。
- 3) 終業時に、各パートナーごと、カードに基づいた場面についてパートナー同士で振り返り、話し合いを行った。
- 4) 話し合った内容を、記録した。

#### V. 結果

##### 1. アンケートについて

カードの内容、マインドを意識して行動できるようになったか、デブリーフィングの現状について、マインドの3つの心について、病棟の看護師にアンケートを実施した。21人中、17人の回答が得られた。カードの内容について、わかりやすいと回答した人が多く（約9割）、「具体的に書いてありわかりやすかった」や「一目でわかる」などの意見があった。

デブリーフィングを行いやすくなったかどうかについて、「やりやすくなった」が8割、「変わらない」が2割であった。

マインドを意識して行動できるようになったかについて、行動できるようになったと回答した人が多く（約9割）、「カードを視覚的に見るため意識できる」や「朝配られることで一日覚えていられ、検温や処置の場面で自分や相手の行動をとらえることができる」などの意見があった。

3つのマインドについて、実際に記入できた人が7割、記入できなかった人が3割であった。記入できなかった人の中には、「カードを見れば答えられる」という意見もあった。

##### 2. デブリーフィングの内容について（表1）

表1のような意見が得られた。



図1 カード

実際にデブリーフィングで使用しているマインドカード

表1 デブリーフィングで出た意見  
実際にデブリーフィングを行ったあと、スタッフに記入してもらった意見

マインド	デブリーフィング内容
与える心	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患者の情報を伝え合い、やってくれたことに対して“ありがとう”と声に出すことができていた。</li> <li>・相手に指導することで、自分も振り返り学べた。</li> <li>・受け持ち患者の情報など、持っている情報をお互い出し合いながら行動することができた。</li> </ul>
自立・自助の心	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人工骨頭置換術後の離床時、その日は離床はリスクが高いと判断し、話し合い、離床は見送った。</li> <li>・ベッド上安静が長かった患者の歩行器歩行を単独歩行にして良いか迷ったとき、パートナーに相談しその患者の性格も考え単独歩行とした。結果患者も喜び売店まで歩行していた。</li> <li>・日常生活動作に独歩を取り入れるか新人に判断を促してみると、しっかりアセスメントできていた。</li> </ul>
複眼の心	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患者が、傷ついたことがあったが、本人のそばに寄り添い話しを聴き、どのような対応が適切かお互い情報を共有して関わるることができた。</li> <li>・パートナーで、互いに意見を出し合いつつ、所在を明らかにしながら行動できたので、効率よく時間内に終わることができた。</li> <li>・手術翌日尿道カテーテル抜去しない希望あり。パートナーにも患者本人の希望を伝えたことで、何度も同じ話を繰り返すことなく情報共有できた。</li> </ul>

## VI. 考 察

マインドの浸透状況については、アンケート結果より、マインドを実際に記入できた人が多く、ほとんどの人がマインドを意識して行動できるようになったと答えている。このことから、カードを使用したことで、マインドが浸透していることがわかった。

カードの効果については、マインドと、マインドをわかりやすく置き換えた言葉をカードへ記載したことで、具体的に書いてありわかりやすかったという意見がでた。國澤らが、図・表、写真、アニメーション機能を使って視覚からの情報伝達を行うことにより、言葉による情報を補うことができる<sup>2)</sup>と述べているように、カードを使う事で視覚的に情報が入り、意識しやすくなった。さらに、朝カードを配ることで、1日にカードを何度もみることとなり、マインドの浸透を深めることにつながったのではないかと考えられる。

デブリーフィングについては、アンケート結果より、カードを使用したことでデブリーフィングがやりやすくなったという意見が多かった。小野は、何について話し合うのが明確でないと、論

点が拡散してしまい、到達点になかなかとどろ着かない。また、設定した目的を丁寧に伝え、共有することで議題に関連する論点が自然と広がる<sup>3)</sup>と述べている。このことから、カードを使用してデブリーフィングを行ったことで、何について話し合うかが明確となり、デブリーフィングが行いやすくなったのではないかと考える。デブリーフィングの内容を振り返ってみると、与える心については感謝の心を書かれた内容があった。自立・自助の心については相手の経験年数に関係なく意見が出し合っている様子がわかる意見があった。この2つの心についてはマインドに沿ったデブリーフィングが行われていることがわかった。複眼の心については相手の目線に立った意見がなかった。しかし、一方的ではなくパートナーで話し合いができていた様子が伺えた。以前カードを使用せず振り返りを行っていた時に、先輩が後輩に指導する反省会のような時間になっていた経緯がある。その時と比較すると、カードを使用し、話し合う内容を示したことで、互いにそれぞれ意見を出し合えるようなデブリーフィングを行えるようになったと考えられる。

田中らは、言葉に出して相手の良かったことや自身の行動を振り返る事で互いの思いを知ることができ、その結果無意識に行っていたことを意識するようになる<sup>4)</sup>と述べている。このことから、デブリーフィングで互いに意見を出し合えるということは、日々の業務でも相手を意識するようになり、良好な関係性が築けて、パートナーシップの向上へつながると考えられる。

## Ⅶ. おわりに

今回カードを作成し、デブリーフィングを行ったことで、パートナーシップ向上への一歩となった。しかし、マンネリ化している現状や、マインドからずれたデブリーフィングになっているものもあり、さらに工夫が必要だと気づいたため、今後のデブリーフィングの取り組みに生かしていきたい。

## 文 献

- 1) 橘幸子, 上山香代子. PNS導入・運営テキスト 導入から運営, 監査・評価, フィードバックまで. 東京:日総研;2014. p.12.
- 2) 國澤尚子. はじめて学ぶ“伝わる”プレゼンテーション-患者指導, カンファレンスから学会・院内発表まで-. 東京:総合医学社;2019. P.25.
- 3) 小野悟. ファシリテーターの役割がカンファレンスを左右する. 精神科看護 2016;43 (4): 10-5.
- 4) 田中朋子, 木村浩美, 齊藤亜矢子. 手術室看護師のチーム総合力に対する認識の変化-デブリーフィングを用いて-. 日看会論集:急性期看 2019;49:210-3.